

ドモリのことで

六年 ○○ 一彦

小に転校してドモリということではいろいろと苦労をした。転校して間もないころ、ぼくは、国語の本が読めなかった。けっして字が読めなかったのではない。ドモルということ深く考えずぎていた。

みんなも最初からよく笑った。そのたびに「このくそドモリ、なんとかならないもんかネ！」と考えながらも、休み時間に泣いたものでした。

そんな毎日をすごしていたある日、学級委員がみんなに本を読ませていた。

ぼくの番になった。いっしょうけんめい読んだ。読めた。

うれしかった。

みんながいっせいに拍手をしてくれた。

ぼくは、そのことをいつまでもおぼえているつもりである。

そんなある日、児童会の選挙があった。

五年の書記に立候補した。

会長、副会長と、みるみるうちに終わった。

つぎは、五年の書記。

一番最初は、ぼくだった。

それこそあがった。

ドモッタ時みんなが笑った。

その時、友だちが、

「ドモっちゃいけねえのかよ」とか「てめえが、あの立場だったらどうする」と、口々に笑った人に悪口を言っていた。

そのときみんなの好意がうれしかった。

ある日、ことばの教室に行った。

ことばの教室に行ってから催眠、また本読み、会話、説明などいろいろとやった。とくに・最近ではドモリのことで、ぜんぜん関係なく勉強をしている。とくに、よくなったのが、国語、算数、社会などの発表や、本読み。すらすらといけるといことがとてもうれしい。

今ではもう気にしていないし、ドモリということも忘れてる。

もうドキドキもしない。

本読みをする時も、みんなよりも「うまい。」

といわれるほどになった。通ってから一年もたっていないが、中学に行くまでに直したい。

今も、ひしひしとやっている。そのせいか、五年の時仲の悪かった「大塚君」と、よく工作仲間、マンガ仲間として、遊び、また勉強している。

今まで、自信のなかった班長にも、みんな（小林君とか、あしざわ君とか）に、「やれよ、やれよ。」などといわれ、立候補した。

今では一班の班長、また、書記、議長などやっている。

ドモリがとれていく。こんなことは大人になっても、わすれずにぼくの心に残る思い出となることでしょう。

（以上の文では、児童会の役員選挙がことばの教室通級以前に行われたと受け取れますが、実は、役員選挙は5年生の3学期にあったので、一彦君の記憶違いになります。）

とうひょう

五年 ○○ 一彦

選挙の朝、「おっこちでも、もともとだ。」とひとりごとをいって、ふとんをはいだ。

八時、学校へ行く時間である。ぼくは外へ「ガバルゾーッ。」と言って学校へ飛び出した。

時間は、流れるように過ぎていった。二時間目の休み時間、とつぜん放送があった。それは、選挙のことであった。

「会長、副会長、書記選挙がありますので、三時間目が始まりましたら、A V室へきてください。」と、石井先生の声が流れてきた。

『カーンカーン。』チャイムになった。全員ろう下へならんだ。

A V室に入った時、ぼくはドキドキしていた。

どうしてかと言うと、書記になれるかなと思っていたからだ。

あいさつの時であった。ぼくはふるえていた。転校してきた時とおなじふるえが来た。ぼくは、見ている人を、「かぼちゃ、かぼちゃ」と思っていた。

会長、副会長と、みるみるうちにすぎた。でも、そのおまじないはきかなかった。やはり、あがってしまったのだ。「この学校をゆたかにしよう」と、ぼくは言いたかった。

「今度、ぼくが書記に立候補した一彦です。」ここまでは、スラスラ言えた。が、「副会長と…」と言い出した時、つかえてしまった。

ぼくは続けてもっと言おうとしたが、はじかしくて、どう言ってもよいかわからなくなってしまった。だけど、ぼくは、続けてゆっくりとつかえないように言った。もう少しで終るところだった。その時、中丸君が「うるせえ、笑うなー。」と、どなった。ぼくは、やっぱり友だちだなあと考えた。あいわつが終り、とうとうまちにまった投票の時、みんなに会長、副会長、書記の名前の書いてある紙がわたされた。その時、六年生の男子が、「ガンバレよ。」と、言ってくれた。ぼくは、思わず「ありがとう、ぼくに応援してくれて。」と心の中でつぶやいた。

四年生の中で、ぼくをみつめているものがいた。

とうとう、投票箱に入れる時が来た。ぼくは、「きっと勝つ、きっと。」と、心の中で思い続け

た。

四年生から六年生まで、会長への投票が終った。こんどは、四年生の書記、五年生の副会長・書記入れる番であった。その時、ぼくは、自分と四年の男子に入れた。会長はよくおぼえてないが、副会長は矢ヶ部に入れた。ぼくは、きっとりっぱな書記になってみせると心にちかった。発表は、昼休み、十二時四十五分にはじまった。

一時になった。ぼくがトップ。最後の一まい。さとう、矢ヶ部、斉藤、西山。とうとうぼくが当選した。ぼくは、飛び上がった。

ぼくに入れてくれた人は全部で百三人でした。

ぼくは、みんなに一言お礼を言いたい。「ありがとう。」と。

（その後、6年生になった一彦君は、児童会役員、運動会で副団長として、さらに活躍していきます。）

一彦君以上の勇気を！

私たちのクラスには、一彦君という人がいます。一彦君は、あがるとすぐどもる人です。

一彦君のどもりは、はじめはきにしませんでした。が、ある日、国語の本を読んでいると、どもってしまいました。

みんな、
「クッ。」

と、ふきだして、笑ってしまいました。もちろん、私もその仲間です。みんなが机に本をおいて、笑っているなかで、ある声が、飛んできました。

先生の声です。
「泣いている。」

先生の声は、おそかったと言うべきでしょう。もう、一彦君は、顔を机にふせて泣いていたのでした。

みんなの口は、さきほどの口より、もっと「ボ
カッー。」と、開いています。

「あいつ、真剣だったんだ。」

と、私は思いました。クラスの大部分も、そう感
じたことでしょう。

それからというものは、みんな笑わなくなりま
した。でも、一彦君が、どもって、みんなが笑わ
なくても、一彦君が、最後に泣くことには、かわ
りありませんでした。

ところが、ある日、信じがたいことがおきまし
た。一彦君がこの学校の書記に立候補したのです。

今日は、その選挙の日です。

時間は、あっという間に過ぎ、一彦君の演説が
始まるころです。

私は、自分がやるかのように、
「ドキ ドキ。」

心臓がなっています。

「うまくできるかなあ。」

「みんなを、カボチャと思っているよって言っ
たけどなあ。」って、それこそ、不安でいっぱい
でした。

ざわめきが消えました。あつい空気が部屋じゅ
うに広がります。

「今度、書記に立候補した 一彦です。」

一彦君の第一声は、スラスラとしていてはっきり
聞こえました。

私は、

「ああよかった。」

と思いました。が、次に、おそるべきことがおこ
ったのです。どもっちゃったんです。四年生が中
心に立ち、「ゲラ ゲラ」と、品の悪い口ぶりで
笑い出しました。

私は、

「あ～あ。」

と、がっかりする前に、

「大じょうぶかなあ。」

「これをきっかけに、大へんな失敗をまねかない

かな。」

と、今にもバトンタッチしたくてたまりません
でした。次第に、笑い声は広がり、一彦君のどもり
は、増すばかりです。

「もう目が赤くなって。あ～あ、だめだ。」

と思いました。

でも、

「よ、よ～ろしく、お、お、おねがいます。」
と、つかえ、つかえ言えました。私は、けっ
して望みを失わない一彦君が、大きく見えました。

また、次に、おどろくべきことが、おこりまし
た。

「笑うのやめろよ！」

と、中丸君のことば。

次に、また、

「やめろよっ。」

と、我妻君のコトバ。やや後をふりかえると、我
妻君がやすめの姿勢で、中丸君は、よく見えな
かったけど、二人とも顔はいかにも「ちくしょう、
笑いやがって」という様子です。私も「なによあ
の四年。」と思いました。知らず知らずのうち、
私はやじをとばしていたのです。

教室に行ってから、先生のお話がありました。

「今の四年と、はじめはあなたたちも同じよ。」

と、おっしゃいました。

私は、さっきのやじをとばす前に、みんなが笑
ったとき、自分だったらどうするだろうと考える
べきだったと思います。

私は、今日の選挙を、みんなが思うように

「四年め 死ぬ。」

というのとは反対に、小気味よくさえ感じられ
ました。

それは、五年一組のすばらしさ、そして、私の
考え方、力のなさをはじめて知ったからです。

私は、わがままや計画を立てても実行しないと
いうような欠点の部分を、一彦君以上の勇気と努
力で埋めていこう。一彦君に負けないように。

一彦君へ 先生より

梅村 正俊

君は、笹川さんの作文を読んで、どんな感じを
持ったのだろう。

先生は、どもりながらも最後まで演説をしたし
たという君の努力、勇気が他の人の心を感動させ、
そして、一彦君以上の勇気を持ち、努力をしたい
と考えさせたということが、どんなにすばらしい
ことなのかを君に知ってもらいたくて、この作文
をことばの教室の文集 “つくし” に載せました。

もし君がどもりではなく、何の努力をせずに何
のこともなく演説をすませたとしたら、聞いた人
にそれほどの感動を与えはしなかったでしょう。
また、どもってしまった時、すぐ演説をやめてい
たとしたら、反対に、一彦君みたいにはなりたく
ないと思われたいたかもしれません。

君は、けっして、俺は勇気があるんだぞ、なん
てえばるつもりで最後まで演説したのではないと
思います。君は、きっと、少し恥ずかしかったけ
れど、立候補したからにはやるだけのことはやる
んだという気持ちでいっぱいだったろうと思いま
す。そして最後までがんばり通したのだと思いま
す。

ところがどうでしょう。そのことが、人の心を
打ったのです。感動させたのです。それは、笹川
さんの作文からだけでなく、五の一文集にのった
君のことでの作文からもわかります。それに、四
年生が君を笑った時、すぐに君をかばってくれた
仲間がいたことでもわかります。

”どもらないで話せばいいな”、確かにそうか
もしれません。でも君は、もっともっと大切なこ
とがあることに気がついたと思うのです。

人には誰にでも探せばいろいろ欠点に見えるこ

とがあります。欠点がないからすばらしい人なの
ではありません。そんな人はいないのでから。

自分に欠点をよく知り、努力して欠点をなくし
ていこうとする姿が尊いのです。

走ることが君より遅い、クラスでも一番遅いと
いう人（これは欠点とは違いますが）が、遅くて
も最後までがんばって走っている姿を見れば、君
だって「あいつやるな。」と心を動かされると思
います。このことが大切だと思うのです。

もう一つ大切なことがあります。それは、人が
努力している姿を見抜く力があるかどうかという
ことです。笹川さんのすばらしいのは、この点だ
と思います。さらに、人の努力をみて、それを自
分のものにしようとする姿がえらいと思います。
先生は笹川さんのことはぜんぜん知りません。で
も、とっても明るく、心の優しい人なのではない
かと思います。

先生は、君の努力、そして勇気を見抜く心の目
を持った笹川さん、そして君のことをはげまし、
助けてくれている5年1組（今は6年1組ですが）
の仲間に最大の拍手を贈りたいと思います。

もうすぐ君は小学校を卒業します。その前にも
う一度、書記に立候補したときのことを思い出
してみてください。このときのいろいろなできごと
は、きっと君の心が大人になっていくのにプラス
になることを教えてくれると思います。

（千葉県千葉市立幸町第二小学校ことばの教室文集）
（ “つくし” から引用 1976.3（昭和51年3月）発行 ）